慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義(二): 一八四八年の革命以後におけるマルクスおよびエンゲルスとイギリス労働者階級
Sub Title	British labour movement and Marxism in the 19th century (2)
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.4 (1961. 4) ,p.269(19)- 284(34)
JaLC DOI	10.14991/001.19610401-0019
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610401-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のである。

- (1) 拙稿「西アフリカ・マーケッティング・ボード下のロコア智 付機構の研究」慶応義塾経済学会年報1、一九五八、一八〇頁。(2) F. Le Gros Clark, Henry Collins, Thomas Hodgkin, Amanke Okafor; The New West Africa, 1953, pp. 112~3. (3) J. S. Furnivall; Colonial Policy and Practice, A Comparative Study of Burma and Netherlands India, 1948, p. 98.
- (4) Levin; op. cit., p. 215& Andrus; op. cit., p. 182.
- (10) Andrus; op. cit., p. 183.
- (6) Levin; op. cit., p. 174.
- (r) Andrus; op. cit., p. 172.
- (∞) cf. Levin; op. cit., pp. 77 ff
- (๑) Ibid., p. 184.

9

ビルマの米生産の拡張に大きな原因であった土地は、戦前にすで

物である、このような輸出経済構造にほかならなかったのである。 面する。すなわち植民地的輸出経済構造は、植民地の地位から脱す で、農民は輸出用財を生産するか、土地を遊休させるかの選択に直 ることによって払拭できる要素もあるが、政治的変化だけでは動か 地の拡張は堰堤、灌漑、排水工事が必要であり、このことは米生産 ン峡谷(Hukawng Valley)ぐらいだとしている。これ以上の耕 積をもっているのは、著名なマラリア地帯である上ビルマのフコー か、〈アフリカのココアのようなばあい〉ゼロに近いと思われる の である。そして、輸出用財に対する国内の需要の所得弾力性はゼロ の過程は、生産可能曲線上を自由に動くのとは異なり、非可逆的変化 の限界費用が著しく増加したことを意味する。しかし輸出経済成立 大きな米の耕作可能地はなくなった、 に限界に達した。クリスチャンは、一九四一年に、ビルマには今や すことのできない面もある。独立を獲得したビルマが経済開発計画 これを実行に移したばあい、その与件は過去の歴史的産 現在未開墾地として相当の面

(1) Christian; op. cit., p. 114. 邦訳一五五頁。

(一九六一年二月十五日)

十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義(三)

八四八年の革命以後におけるマルクスおよび

ーティスト運動、一八四八年の革命に臨むマルクス・エンゲルスとチ、マルクス主義における時代的制約

三、革命後における労働運動との背離

-

べている。スの「賃労働と資本」のドイツ版の序文のなかで、つぎのようにのスの「賃労働と資本」のドイツ版の序文のなかで、つぎのようにのフリードリッヒ・エンゲルスは、一八九一年四月に書いたマルク

ており、のちの著作の見地からはゆがんでいたり、まちがってさ作は、個々の点では、一八五九年以後に書かれた著作とことなっれゆえ、第一分冊――『経済学批判』(一八五九年)以前にでた著かった。それは、五〇年代末ごろ、やっと完成したのである。そ「四〇年代には、マルクスはまだ彼の経済学批判を完成していな「四〇年代には、マルクスはまだ彼の経済学批判を完成していな

十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義(二)

飯田

にしなかったところである」(傍点筆者)。 にしなかったところである」(傍点筆者)。 しかし、一般読者をついるということは、自明のことである。そして、そのうちの一語でもかえようなどとは、自明のことである。そして、そのうちの一語でもかえようなどとは、自明のことである。そして、そのうちの一語でもかえようなどとは、私の夢想だる。そして、そのうちの一語でもかえようなどとは、私の夢想だる。そして、そのうちの一語でもかえようなどとは、私の夢想だる。そして、そのうちの一語でもかえようなどとは、私の夢想だる。そして、そのうちの一語でもかえようなどとは、私の夢想だる。そして、そのうちの一語でもかえようなどとは、私の夢想だる。

らの理論には、エンゲルスが指摘しているように部分的な誤謬や革の二人の人類解放の先駆者が忌み嫌ったことであろうし、事実、彼ら、絶対に不可謬でありえないことはいうまでもない。マルクスやり、絶対に不可謬でありえないことはいうまでもない。マルクスやら、絶対学の領域においてチャールス・ダーウィンが樹立した業績自然科学の領域においてチャールス・ダーウィンが樹立した業績

一九 (二六九)

主義段階における諸法則の把握において、必ずしも充分ではなかっ ん、自由競争的な資本主義段階という時代的な制約から、独占資本命の見とおしおよび状勢分析において、欠陥があったことはもちろ

発展と国際的社会主義運動の全般的な衰退のもとで、チャーティス 彼らがどのようにかえるに至ったか、まずこの点からはじめること 年の革命の勃発に際してのマルクスおよびエンゲルスの評価につい ト運動を中心とするイギリス労働者階級の運動にたいする見解を、 なるのは、この事実を物語っている。そこでわれわれは、一八四八 ランスの革命的な状勢を伝えるエンゲルスの論文が、目立って多く ギリスの労働者階級にたいし、 チャーティスト の 機関紙 「ノーザ えにまた、フランスにおける革命的な緊迫した諸状勢について、イ を託するに至った過程について考察したのであった。そしてそれゆ ン・スター」を通じて訴えたのであった。一八四七年になると、フ なかで、彼らが国際的な性格を有する労働運動として、とくにチャ - ティスト運動について注目し、それがイギリスにおける革命的な 本主義の発展とその矛盾の激化、革命的状勢の切迫という諸条件 われわれはすでに、一八四八年の革命以前におけるヨーロッパ資 イギリス社会革命の担い手となるであろうとして大きな希望 とりわけ、一八四八年以後、資本主義生産様式の飛躍的

> (1) マルクス・エンゲルス選集第二巻(大月版)二六七-エンゲルス「賃労働と資本」ドイツ版序文。 八頁、

__

彼らの心はいうまでもなく古典派経済学の批判=革命的・階級的世 とである。 という弁証法的な世界観に媒介され、離れがたく結びついていたこ 命的な運動に注がれており、しかも、 絶えず、ヨーロッパからアジアそしてアメリカ大陸に及ぶ大衆的革 界観に立つ新しい経済学の建設に奪われながら、しかも彼らの限は 歴史においてしめるであろう意義を、きわめて精密に予測し、しか わゆる歴史的なパースペクティブの手法をもって、それらが人間の することによってこれを理論的・法則的に解明したのみならず、 も、もっともヴィヴィッドな筆致をもって描写したことであった。 刻々起りつつある政治的社会的な諸事件を洞察し、的確に把握 クスと エンゲルスの 著作を読んで 深く感銘させられる こと この両者が理論と実践の統一

をえない ブルジョアジー と擡頭する プロレタリアート との階級対 彼らの胸中には、日革命ののちに来るブルジョア階級の権力掌握と 圧迫民族の問題、闫これらから当然でてくるプロレタリアー 立、臼アイルランドやポーランド問題などに象徴的にあらわれた被 封建的な土地貴族の勢力の後退、これに伴って必然的に激化せざる 想うに、一八四八年のフランス二月革命の勃発に臨みつつあった

復活にたいする大きな期待をみることができるであろう。 されてしまったことについて、きびしい自己批判を展開しているの るマルクスとエンゲルスの活動を考えるならば、やはりフランス革 ける商業恐慌の深刻化してゆく様相、そしてチャーティスト運動の 命についての彼らの熱烈な関心と、一八四七年以来、イギリスにお である。これらについてはのちにふれるとして、一八四八年におけ の可能性についての彼らの予想が裏切られ、それが遠い将来に延期 態」の一八九二年のドイツ版序文にみられるように、当時の客観的 くに資本主義の予期しない発展によって、プロレタリア革命の実現 な諸状勢にたいする不的確な把握と、その後の経済状勢の変化、 に附したエンゲルスの序文や、「イギリスにおける労働者階級の状 揮することができず、むしろのちに、「フランスにおける階級闘争」 題として去来していたにちがいない。これらの直面せる課題にたい して彼らがひっさげて起ち向った戦術が、必ずしも充分な効果を発 -共産主義者同盟--の問題がさしせまった当面の課 ٤

引用してみよう。 が、そのなかには、これを示唆する一節がみられるので左にこれを ム」の一八四七年一〇月二六日号に、「イギリスの商業恐慌-エンゲルスは、小市民的・民主主義的な日刊新聞「ラ・レフォル ーティスト運動 - アイルランド」という 論文を 発表している チ

のどの恐慌よりも情烈なものである。一八三七年にも一八四二年 「現在、イギリスが出会っている商業恐慌は、事実上、これまで

十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義(二)

先週の集会を報道している……。」の機関紙『ノーザン・スター』は、大きな欄を七つ以上も使って 運命のなりゆきに身をまかせている。こういうわけで、不平満 栄の時期には企業家によって搾取され、いまでは大量に解雇され、 者ばかりである。こんな事態が、労働者のあいだにただならぬ動 の労働者たちの集会が急激にふえている。チャーティスト労働者 揺をひきおこしていることはいうまでもない。彼らは、商業の繁 るところに停滞があり、どこを見ても街頭にほおりだされた労働 産業の全部門が、その運動の最中に停止状態に陥っている。いた にも、景気後退は現在ほど全面的ではなかった。広汎なイギリ

るものがあることを印象的に説明している。 望的な動きと相まってイングランドはあたかも革命の到来を想わせ 驚くにはあたらないであろう」として、アイルランド人労働者の絶 わめて重要な改革に同意せざるをえなくさせるとしても、まったく いて、「現在の恐慌が、大きな騒擾をひきおこし、 カシア地方に勃発した深刻な失業の労働者階級にあたえた影響につ イギリス全土で準備をおこなっていた」ことに注目し、さらにラン トたちは、一一月のはじめから全国で行われる地方選挙のために、 て一八四二年以後、一旦衰えた運動の再燃について、「チャーティス オコンナーの活躍についてふれ、迫り来る大恐慌の萌しを契機とし そしてとくにチャーティスト運動の指導者ジュリアン・ハーニーと これが政府をき

エンゲルスが、ブルジョア革命の前夜ともいうべき一八四七年以

の思想を、つぎの一節は物語っている。 展に逆行する反動的ともいうべき事業に堕落すべき運命の種子を宿 していたのであるが、革命的条件だけを不当に評価して、チャー は、オーエンの協同主義とも異なる性格のものであり、 ィストの脆弱な面を正しく認識することができなかったエンゲル いたいわば 一種の 内国殖民運動=小農民創設運動 であった。 それ た「土地計画」("Land Scheme") は、一八四八年後までもつづ ト運動の一時的な崩壊以後に、オコンナーによって組織的に行われ ア革命勃発にたいする楽観的ともいうべき予測は、一八四七年一一 月一日号の『レフォルム』に発表したエンゲルスの「チャーティス トの土地綱領」にもあらわれている。一八四二年後のチャーティス に論じたところであるが、このようなイギリスにおけるプロレタリの担い手としてチャーティストを期待していたことは、すでに詳細 の担い手としてチャー 前に、この恐慌の結果としてイギリスに社会革命の可能性を信じ、そ 資本主義発 ス テ

常な成功をおさめ、チャーティスト土地組合はすでに二、三〇万常な成功をおさめ、チャーティスト土地組合はすでに二、三〇万変的な小農民階級をつくるために、工場労働者の一部を労働市場からきりはなして、工場労働者がおたがいのあいだでおこなっている過度の競争を緩和させようと期待しているわけである。ほかいる過度の競争を緩和させようと期待しているわけである。ほかいる過度の競争を緩和させようと期待しているわけである。ほかいる過度の競争を緩和させようと期待しているわけである。ほかいる過度の競争を緩和させようと期待しているわけである。ほかいる過度の競争を終われている方法で、まったの労働者にあば、土地では対象がある。

人の組合員を擁し、六万ポンド(「五〇万フラン)の組合財産を人の組合員を擁し、六万ポンド(「五〇万フラン)の組合財産を人民が奪取するための全国的な騒擾に転化することが地所有権を人民が奪取するための全国的な騒擾に転化することがいいてきたと同じ程度でひろがりつづければ、ついには全国の土づいてきたと同じ程度でひろがりつづければ、ついには全国の土づいてきたと同じ程度でひろがりつづければ、ついには全国の土が、の組合員を擁し、六万ポンド(「五〇万フラン)の組合財産を

相違を明瞭に反映しているものといえよう。

おおれるのであって、これらを一八四七年一一月六は、チャーティストの精力的な指導者オコンナーと新聞「ノーザン・は、読む者をしてまことに隔世の感を抱かしめるに充分であり、チャーティストの構動のであって、これらを一八四八年の革命以撃からの擁護がみられるのであって、これらを一八四八年の革命以撃からの擁護がみられるのであって、これらを一八四八年の革命以撃からの擁護がみられるのであって、これらを一八四八年の革命以撃からの擁護がみられるのであって、これらを一八四八年の革命以撃からの擁護がみられるのであって、これらを一八四八年の革命以北、読む者をしてまるとに隔世の感を抱かしめるに充分であり、チャーティストの実会」に日号にのせた「一八四七年産業を視り、チャーティストの実会」に日号にのせた「一八四七年産業を視り、チャーティストの実会」に日号にのせた「一八四七年産業を視り、チャーティストの実会」に日号にのせた「一八四十年産業を視り、チャーティストの実会」に日号にのせた。

法改正運動」のなかで、つぎのようにのべている。一一月二○日号の「ノーザン・スター」にのせた「フランスの選挙いする高い評価がみられる。たとえば、エンゲルスは、一八四七年いするにおける革命と同時に、フランス人民の革命的情熱にた

やまず、暴動に慣れ、喜んで革命におもむくこと酒場にゆくのに異「立ち上がれば必ず目のまえのあらゆるものを粉砕しなければ

ならないパリの労働者 —— この同じ労働者が以上のような忍耐からたいパリの労働者 —— この同じ労働者が以上のような忍耐があらい。 市街を横ぎって乗合馬車や荷車や客馬車をよこたる、あらゆる露路にバリケードを築き、あらゆる小道を要塞となえ、あらゆる露路にバリケードを築き、あらゆる小道を要塞となる、さらに一切の抵抗を排してバスティーコからチュイルリ宮にし、さらに一切の抵抗を排してバスティーコからチュイルリ宮にし、さらに一切の抵抗を排してバスティーコからチュイルリ宮にし、さらに一切の抵抗を排してバスティーコからチュイルリ宮に近ているのであるう」。

ボ、彼らが、イギリスのように、資本主義の発展した国における労が、彼らが、イギリスのように、資本主義の発展した国における労が、彼らが、イギリスのように、資本主義の発展した国における労力という。とは、彼らの演説から窺うとができるのであったということができるのである。そこで、つぎに掲げるのは、一八四七年一一月二九日、ロンドンのポーランド革命記念集会におけるマルクスとエンゲルスが、この革命とポーランド問題に典型的にみられたとが、次第に熟しつつあったということができるのである。そこで、つぎに掲げるのは、一八四七年一一月二九日、ロンドンのポーランド革命記念集会におけるマルクスとエンゲルスの演説から窺うされ、次第に熟しつつあったということができるのである。そこで、つぎに掲げるのは、一八四七年一一月二九日、ロンドンのポーランド革命記念集会におけるマルクスとエンゲルスの演説がある。そこれ、彼らが、イギリスのように、資本主義の発展した国における労が、彼らが、イギリスのように、資本主義の発展した国における労が、彼らが、イギリスのように、資本主義の発展した国における労が、彼らが、大学の対域を持ている。

のなかで、つぎのように訴える。たかを示すものとして面白いと思う。まず、マルクスは、その演説うとしていた被圧迫民族の運動とどのように結びつけようとしてい働者階級の運動を、ツァーリズムの奴隷的な支配と桎梏を絶ちきろ

すべての国のうちで、イギリスこそは、プロレタリアートとブルジョアジーの対立がもっともすすんだ国である。だから、イギリスで解放されるのである。チャーティスト諸君は、だい、イギリスで解放されるのである。チャーティスト諸君は、だい、イギリスで解放されるのである。チャーティスト諸君は、だからして、諸民族の解放のための殊勝なれど仇な願いを表明すべからして、諸民族の解放のための殊勝なれど仇な願いを表明すべからして、諸民族の解放のための殊勝なれど仇な願いを表明すべた。全旧社会を撃破したという誇らかな意識をもってよろしいのでして、「信息筆者」。

資本主義のもっとも発展したイギリスにおけるチャーティスト運

とをのべている。 とをのべている。 とをのべている。 とをのべている。 とをのべている。 とかち全ヨーロッパにおけるブルジョア革命は、急速且つ大規模な形においは、一八四八年の革命の前夜において、彼らを支配した革命観で、コーロッパにおけるブルジョア革命は、急速且つ大規模な形においい、 やがて 全被圧迫諸民族解放の 狼火となる とする 世界革命思想動の勝利は、すなわち全ヨーロッパにおける革命のための序曲とな

「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全ヨーロッパ諸国の解放、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全国により、「私の意見によれば、民主主義の勝利、全国により、「私の意見によれば、民主、日本の語の解放、「私の意見によれば、日本の語の解放、「私の意見によれば、日本の語の語の思いない。」

か」にたいして、
こうした彼らの革命観が、もっとも明瞭にあらわれたのは、共産とうした彼らの革命観が、もっとも明瞭にあらわれたのは、共産主義の原理」においてがけてエンゲルスによって執筆された「共産主義の原理」においてをあるが、その一八間、「この革命は、どんな発展の道をたどるだろうあるが、その一八間、「この革命は、どんな発展の道をたどるだろうか」にたいして、

れによって、直接にかあるいは間接に、プロレタリアートの政治答。それはなによりもまず、民主主義的国家制度を、そしてそ

的支配をうちたてるであろう。イギリスのようにプロレタリアが いまっとプロレタリアートのがわに移行しはじめ、その政治上のすべての利益も全面的にますますプロレタリアだけでなく小農民や小市民は、いまたっとプロレタリアートのがわに移行しはじめ、その政治上のすべての利益も全面的にますますプロレタリアだけでなく小農民や小たなり、したがって、遠からずプロレタリアだけでなく小農民や小でなり、したがって、遠からずプロレタリアだけでなく小農民や小でなり、したがって、遠からずプロレタリアだけでなく小農民や小でなり、したがって、遠からずプロレタリアだけでなく小農民や小でなり、したがって、遠からずプロレタリアだけでなく小農民や小がである。だがその闘争は、プロレタリアートの勝利をもっておわるろう。だがその闘争は、プロレタリアートの勝利をもっておわるろう。だがその闘争は、プロレタリアートの勝利をもっておわるろう。だがその闘争は、プロレタリアートの勝利をもっておわるろう。だがその闘争は、プロレタリアートの勝利をもっておわるろう。だがその闘争は、プロレタリアートの勝利をもっておわるろう。だがその闘争は、プロレタリアートの勝利をもっておわるろう。だがその関争は、プロレタリアートの勝利をもっておわるろう。だがその関争は、アートのように対している。

だろうか」とその回答はまことに示唆的である。これによれば、いいては、一九間、「この革命は、ただ一国だけに単独に起りうるすべての権利を獲得できる絶好の機会を見出すことができるというプロレタリアートはブルジョアジーから権力を奪取し、小農民や小プロレタリアートはブルジョアジーから権力を奪取し、小農民や小プロレタリアートはブルジョアジーから権力を奪取し、小農民や小プロレタリアートはブルジョアジーから権力を奪取し、小農民や小

タリアートとを、すでに社会の二つの決定的な階級にし、またことに依存している。さらに、大工業は、ブルジョアジーとプロレ結びつけているので、どこの国の人民も、よその国に起こったこすでに地球上のすべての人民、とりわけ文明国の人民をたがいに答 いや、起りえない。大工業は、世界市場をつくり出して、

世界的な地盤で起こるだろう。常に促進させるだろう。それはひとつの世界革命であり、従って常に促進させるだろう。それはひとつの世界革命であり、従ってし、それらの国々のこれまでの発展様式をまったく一変させ、非 革命を遂行するのは、ドイツではもっとも緩慢でもっとも困難で た工業、 って、 ス、アメリカ、フランス、ドイツで、同時に起こる革命となるでなく、すべての文明国で、いいかえると、すくなくとも、イギリっている。だから、共産主義革命は、けっして一国だけのもので工業は、文明諸国における社会の発展を、すでに均等にしてしま あり、イギリスではもっとも急激でもっとも容易だろう。 あろう。この革命は、これらの国々で、どの国が他よりも発達し 工業は、文明諸国における社会の発展を、 階級のあ 世界の他の国々にも同じようにいちじるしい反作用をおよぼ 急激に、あるいは緩慢に発展するであろう。だから、この より大きな富、また生産力のより大きな量をもつかに従 いだの闘争を、 現在のおもな闘争にした。 この点で大 それ

時におけるマルクスとエンゲルスの革命思想は、資本主義発展におれていた。たいのでは、そしてさらに連鎖反応をおこして全世界を革命の必要した国へ、そしてさらに連鎖反応をおこして全世界を革命のルツボと化せしめるとする世界革命の思想は、一九一七年の三月革命のボとなったロシア革命と西欧社会主義革命との関係におけるトロツがとれてした国へ、そしてさらに連鎖反応をおこして全世界を革命のル資本主義がもっとも早くから発展している国から、よりおくれて資本主義がもっとも早くから発展している国から、よりおくれて

到来とともに、歴史的な現実によって証明されるわけである。 たとえば、恐慌の問題についても一八四七く八年の一時的な まよび範囲について、多分に希望観測的な誤認があったため、資本 を着過したことは否定できない。この誤謬は、やがて一八五〇 年代にはじまる資本主義の相対的安定期―ヴィクトリア黄金時代の 程度 を看過したことは否定できない。この誤謬は、やがて一八五〇 年代にはじまる資本主義の相対的安定期―ヴィクトリア黄金時代の 程度 を看過したことは否定できない。この誤謬は、やがて一八五〇 年代にはじまる資本主義の相対的安定期―ヴィクトリア黄金時代の 程度 を表が、その諸矛盾を克服して前進する能力と適応性を有している とを看過したことは否定できない。との誤謬は、やがて一八五〇 年代にはじまる資本主義の相対的安定期―ヴィクトリア黄金時代の とを看過したことは否定できない。この誤謬は、やがて一八五〇 を表が、その諸矛盾を克服して前進する能力と適応性を有している とを看過したことは否定できない。この誤謬は、やがて一八五〇 を表が、その諸矛盾を克服して前進する能力と適応性を有している。 とを看過したことは否定できない。この誤謬は、やがて一八五〇 を表が、その諸矛盾を克服して前進するに、とができなかった結果で は、ことができない。との誤謬は、やがて一八五〇 ないる。とができない。との誤謬は、やがて一八五〇 を表が、その諸矛盾を克服して前進する能力と適応性を有している。 とを看過したことは否定できない。との誤謬は、やがて一八五〇 を表が、ともに、歴史的な現実によって証明されるわけである。

れはじめた。イギリス資本主義における相対的安定期の開始とこれの運動、とくにイギリスのチャーティスト運動にたいして、世界革命の担い手、その口火を切る前衛部隊としての役割をあたえたのでは、たしかに、かつての蜂起に劣らぬほどのたくましい昂まりを示は、たしかに、かつての蜂起に劣らぬほどのたくましい昂まりを示した。しかしそれにもかかわらず、革命的な蜂起にまで発展しえなかったのは、さきにのべたように、資本主義が、体制的に内包する矛盾のもっとも深刻な表現としての恐慌が、一八四八年の場合に資矛盾のもっとも深刻な表現としての恐慌が、一八四八年の場合に資本主義の生存にとって致命的なものではなく、むしろその後の経済本主義の生存にとって致命的なものではなく、むしろその後の経済をれと同時に、チャーティスト運動内部にも運動の方針、その支持を開発してイデオロギーなどの問題について目立った変化があらわれはじめた。イギリス資本主義における相対的安定期の開始とこれればじめた。イギリス資本主義における相対的安定期の開始とこれればじめた。

スを中心とする国際的労働運動の発展を辿りながら、これらの問題 り。そこでつぎに、一八四八年以後、一八五○年代におけるイギリ に接近することにしよう。 れについては、すでに詳論したところによって明らかであろうと思 のような評価をなし、この上もなく大きな期待をかけていたか、こ 動から何を学んだか、そしてまたイギリス労働者階級とその指導者 った。マルクスとエンゲルスが、チャーティスト運動について、ど れ、もしくはこれに反撥したか、この点について究明することであ スが、マルクス主義形成の過程において、 ゆる第一インターナルの結成へ、彼らを方向づけたものであった。 なことに、そのような歴史的な現実は、国際的な組織としてのいわ クスやエンゲルスの期待を、完全に裏切ったものであったが、皮肉 火をきられるであろうとした世界プロレタリア革命にたいするマル 主義のめざましい発展、そしてその結果としておこった国際的なプ につづくドイツおよびフランス、アメリカ合衆国などにおける資本 に相応する労働者階級の運動におけるさまざまな変化、そしてそれ 最初に指摘したように、われわれの目的は、マルクスとエンゲル レタリアートの運動の発展は、 マルクスやエンゲルスの思想をどのように理解しこれをうけい かつてチャーティストによって口 イギリス労働者階級の運

四三頁。(1) マルクス・エンゲルス全集、邦訳(大月版)第四巻三四二―三

- 三田学会雑誌第五三巻第一二号を参照。四八年以前のチャーティスト運動とマルクスおよびエンゲルス」四八年以前のチャーティスト運動とマルクスお表(一)―一八(2) 拙稿「十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義(一)―一八
- の事実である。 る慈悲としての パスティーユ』からの逃避を目的としたもので として、 ville, 1960, p. 95])、オコンナーの土地計画も、社会変革の主体 1914 January 1959, edited by Asa Briggs and John Sa-図は、 あったことは、チャーティスト運動を研究する者にとっては周知 が)、苦汗制度・低賃金や 新救貧法のもとにおける、かの無残 な が革命の担い手たることができないことは歴史的に明らかである History, In Memory of G. H. Cole, 25 September 1889-協同組合 内での労働者階級の利益の擁護という受動的なものに変化してし まったことを指摘しているが(シドニー・ポラード の理想としての「共同社会」の建設からはなれて、資本主義体制 よる「買物に応じて利子を支払う」運動は、オーエン主義の最終 一八四三年ロッチデールに端を発したオーエンの弟子たちに 本来「共同社会」の建設を目的としたものであって、そ 小農民の創設を企図したのではなく(もちろん、小農民 共同社会建設から小売商へ」 [Essays in Labour ・ポラードによれば、オーエンの協同組合建設の意 「十九世紀の 0
- (4) 拙著「イギリス労働運動の生成」(昭和三四年有斐閣)を参照。

- (6) 前掲書四二〇―四二一頁。
- (7) 前掲書四三〇頁。
- (8) 前掲書四三一頁。
- 10) 前掲書三九一—三九二頁。

9

前掲書三九〇頁。

=

に附した序文の冒頭に、つぎのようにのべている。エンゲルスは、一八八五年の「ケルン共産党裁判の暴露」第三版

「一八五二年、ケルンの共産主義者に判決がくだるとともに、ドイツの独自の労働者運動第一期の幕がおりた。この時期については、いまではほとんどわすれられている。それでも、この時期について、一八三六年から五二年までつづき、ドイツの労働者が、外国にちらばっていったのにつれて、この運動はほとんどすべての文明諸国である。後者こそは最初の国際労働者運動であって、国際労働者である。後者こそは最初の国際労働者運動であって、国際労働者の国際労働者である。後者こそは最初の国際労働者運動であって、国際労働者の国際労働会(第一インターナショナル)の指導的な役割をひきうけた人なを多くうみだした。そして、共産主義者同盟が一八四八年の共協会(第一インターナショナル)の指導的な役割をひきうけた人なを多くうみだした。そして、共産主義者に判決がくだるとともに、ドイツの独自の労働者運動金体を、国際的に結合するもっとも強力な手段となっている」。

られていたという事実から、 であったということはその綱領が、 れた。この団体が、いわゆる第一インターナショナルの先行的形態(3) やイタリアなどの民族主義者からなっていた同胞民主協会が結成さ を中心に、同盟に参加していた共産主義者、急進主義者、ポーランド 種子を伝播した役割は大きかった。イギリスには、チャーティスト 壊滅してしまったが、この団体が、ヨーロッパの天地に、共産主義の 謀的性格から脱して、「共産主義同盟」と改めたのであった。一八四 発したのであるが、一八三六年になって、この同盟のなかのもっと 八年の革命の失敗以後、ケルン共産党裁判事件を契機として、同盟は た。やがて一八四七年の夏、組織を変えて、かつての秘密結社的陰 かれて新たに「正義者同盟」(Das Bund der Gerechten)をつくっ も急進的な、多くはプロレタリア的な分子は、この秘密同盟からわ イツ人亡命者によってつくられた民主=共和主義的な秘密団体から ように、共産主義者同盟の歴史は、一八三四年、パリにおいて、 にわたって反動的な風潮が濃厚となった。エンゲルスが語っている あきらめてアメリカ大陸に移住するというように、ヨーロッパ全体 リアートの指導者は、あるいはイギリスに亡命し、あるいは革命を 的大地主との間に妥協が生まれ、ドイツおよびフランスのプロレタ の革命的蜂起は、 一八四八年の革命の失敗後、ヨーロッ マルクス主義をチャーティストに媒介したアーネスト・ジョー いたるところで失敗し、 明らかに想像することができるのであ 国際主義と革命的社会主義に彩 パにおけるプロレタリア ブルジョアジー

も、この団体によって活躍した。 ンズ(Ernest Jones)とジュリアン・ハーニー(Julian Harney)

に至ったか、この点である。 運動をふくむこの当時の英国の労働運動の諸要求のなかにマルクス 急激に変貌する資本主義に対応するものとして後期チャーティスト どの興味ある研究があるが、われわれが、ここで問題にするのは、 tion and Notes, by John Saville) やショイエンの「チャーテ the Writings and Speeches of Ernest Jones with Introduc-とエンゲルスは何を感じ、それによって、彼らの見解をどのように Labourism)最近ではジョン・サヴィルの「アーネスト・ジョーン ィストの挑戦」(A. R. Schoyen; The Chartist Challenge) 一八四八年の革命以後の後期チャーティスト運動とマルクスおよ ンゲルスとの関係については、古くはロー チャーティスト (Ernest Jones: Chartist, Selections from ティストから労働主義へ」(Rothstein; From Chartism to そしてまた新たな国際的な運動への展望のための礎石とする トシュタインの「チ な

義の美名にかくれて、労働者を搾取しようとする資本家的な意図のジョア階級の要求であって、マルクスはそれがいわゆる自由貿易主らんで、一八四八年当時の労働者階級の緊急の日常的な要求として、使得を、最終且つ最大の目標として闘ったのではあったが、これとないりまでもなく、チャーティスト運動は、成年男子普通選挙権のいうまでもなく、チャーティスト運動は、成年男子普通選挙権の

時間法について書いた。 五〇年三月号のデモクラティック・レヴュー誌に、つぎのように十 にすることに成功したとき、 通過させたが、これをブルジョアジーが上級法院を通じて、 密結社時代の共産主義者同盟の影響ー までには至らなかった。一八四七年、保守党政府は、十時間法案を ら共産党宣言にいたる みられたような柔軟な戦術的な態度をとることができず、やはり秘 戦闘的な意識を眠りこませるものとして拒否すべきであると考えた おける彼らはまだ、一八六四年、第一インターナショナルの結成時に の道であると絶叫したのである。この意味において一八五〇年代に 兵として期待していたマルクスとエンゲルスを焦慮させた。彼らは のである。従って十時間法案を真向から拒否することこそ、解放へ 十時間法案の欺瞞的性格を暴露しようとするに急な余り、プロレ うした経済上の問題に傾いていったことは、かつて彼らを革命の尖 退潮を峠として、労働者階級の関心が、政治上の権利の獲得よりもこ れ、一八四八年のチャーティスト運動の一時的な昂揚とその急速な 政治的な表現であるとしてはげしく攻撃したのであったが、 アートが階級闘争の途上にある限り、一切の部分的改革は彼らの -としての公式主義・教条主義を払拭する これにたい して、エンゲルスは、 すなわち共産主義の原理か 夕

る、拙劣であり反動的でさえある方策であった。一方において、的にあやまった処置であり、そのうちに自滅の萌芽をふくんでい「十時間法案は、それ自体としてもまた終局の方策としても決定

それは現在の制度を廃止するものではなく、また他方において、それは現在の制度によって交代させられている状態までひきもくの背に現在の制度によって交代させられている状態までひきもくの背に現在の制度によって交代させられている状態までひきもくの背に現在の制度によって交代させられている状態までひきもくの背に現在の制度によって交代させられている状態までひきもくの背に現在の制度を廃止するものではなく、また他方において、それは現在の制度を廃止するものではなく、また他方において、それは現在の制度を廃止するものではなく、また他方において、

のは興味深い。れを廃止するようによびかけてその効果をつぎのようにのべているここにおいてエンゲルスは、むしろ十時間法の無意味を指摘し、こ

「第三に、一八四七年の十時間法の事実上の廃止は、工場主たちを駆ってきわめて猛烈な過剰生産にみちびき、その結果暴落がおたいはたされるであろう。そしてかつて一七九三年および一八四八年になされたよりもさらに徹底的に社会を変革し、プロレタリアートの社会的政治的支配を急速にもたらす革命が不可避的となるであろう」。

あって、ここには明らかに、さきに指摘したように、プロレタリアリアートの支配がうちたてられるモメントをつくり出すというのでの暴落とはげしい窮乏がおこることによって、社会革命とプロレタ存の市場を超える過剰生産恐慌をひきおこし、それと同時に、商品エンゲルスのいうところによれば、工場法の事実上の廃止は、現

らわれている。すなわち、さらにつぎのように訴えている。する態度が、彼らの思想を決定的に支配する基本的な要素としてあし、部分的な改良をもって革命を阻止するものとして徹底的に排撃革命にたいする 楽観的な考え方、 そして改革と 革命とを きりはな

リアートの支配―とわれわれはいう。社会革命とプロレター般的破滅と混沌―と自由貿易論者はいう。社会革命とプロレタ合に拡大することが不可能となっては、工場主の優勢がその終さらに拡大することが不可能となっては、工場主の優勢がその終了生産を日々拡大することに依存している制度において、市場を

の解放期の接近を決定的にはやめるできごとである」。 の解放期の接近を決定的にはやめるできごとである」。 の解放期の接近を決定的にはやめるできごとである」。 の解放期の接近を決定的にはやめるできごとである」。 の解放期の接近を決定的にはやめるできごとである」。 の解放期の接近を決定的にはやめるできごとである」。 の解放期の接近を決定的にはやめるできごとである」。

まなぶであろうということ、いまや彼らは、下院に多数の労働者をことによって、みずから手にいれねばならないことを経験によってかという点を重視し、「それは自分がまず第一に政治権力を奪取する無効にさせられたという事実を、労働者階級がどのように理解するエンゲルスは、十時間法が、ブルジョアジーによって、実質的にエンゲルスは、十時間法が、ブルジョアジーによって、実質的に

けが不当に強調されて、革命をひきおこす要因を社会体制の矛盾の 速に実現する革命が不可避となるというのであって、客観的条件だ 用をひきおこすが如く、プロレタリアー ような重大な要因が現われさえすれば、社会体制があたかも自壊作 る過剰生産恐慌がおこりさえすれば、もしくは、恐慌をひきおこす まり関係なく、ひたすら資本主義体制のもっとも基本的な矛盾であ 革命の到来が、プロレタリアートの主体的な組織や力の問題とはあ 本主義の崩壊→プロレタリア革命という単純な公式である。しかも ある。 れていた革命への途は、資本主義→自由競争→過剰生産→恐慌→資 を、労働者階級の間に復活せしめるものであると考えていたようで ろ十時間法案の 実質的な廃止は、 衰えつつある チャーター の叫び の先進的な担い手であるという確信を少しもかえていないし、 かかわらず、やはり彼はイギリスのプロレタリアートが、社会革命 を認識せねばならないこと」を認識せざるをえないし、従って、十会的地位の改善にたいするなんらの保障をもけっしてもたないことおくることを可能ならしめる普通選挙権による以外には、自分の社 した状勢と異なって、ありうべからざる現象になりつつあったにも したということを、力説する。これは、一八四八年の革命後、チャ 時間法の廃止は、プロレタリア革命にとって有利な条件をつくり の政治的支配、プロレタリア革命の勃発が、一八四七年頃の緊迫 ティストが、次第にその勢力を失い、現実的には、プロレタリアー そしてこの場合、何といっても、エンゲルスの頭のなかに描か こと」を認識せざるをえないし、従って、 トの社会的政治的解放を急

る結論となってあらわれているのである。に掲載された「イギリスの十時間労働法案」の最後にのべられている。このような判断の結果は、一八五〇年四月号の「新ライン評論」の力の問題には、 あまりにも これを 過大評価したことは 事実であ激化のなかに求めたことは正しいが、その担い手として労働者階級

にイギリスの工業家たちが、つぎのような点にいそぎ足でち恐慌を促進するのに役立った。だが恐慌を促進するものは、同時では、その生産手段が販路よりも比較にならぬほど大きい拡張力でもつイギリスの発展過程とそのもっとも手近な目標、すなわち工業にイギリスの発展過程とそのもっとも手近な目標、すなわち工業にイギリスの発展過程とそのもっとも手近な目標、すなわち工業にイギリスの発展過程とそのもっとも手近な目標、すなわち工業がついていることはあきらかである……。

ともに、こんにち労働時間の規制を工業の進歩と矛盾させているなりアートの手に集中することであろう。そして工業の集中とびその力の自由な活動の余地を獲得するために社会革命を必要とびその力の自由な活動の余地を獲得するために社会革命を必要といタリア革命の最初の結果は、大工業を国家すなわち支配的プロルはまったくおのずからたちあらわれる。イギリスにおけるプロルタリア革命の最初の結果は、大工業を国家すなわち支配的プロルタリア革命の最初の結果は、大工業を国家すなわち支配的プロルタリア革命の最初の結果は、大工業を国家すなわち支配的プロルタリア革命の最初の結果は、大工業を国家すなわち支配的プロルタリアートの手に集中することであろう。そして工業の集中とともに、こんにち労働時間の規制を工業の進歩と矛盾させているともに、こんにち労働時間の規制を工業の進歩と矛盾させているともに、こんにち労働時間の規制を工業の進歩と矛盾させているとあります。

おなじく、プロレタリア革命のうちにある」(傍点筆者)。つの解決は、資本と賃労働との対立にもとづくいっさいの問題といっさいの競争関係が消滅する。こうして十時間問題のただひと

ンゲルスは、つぎのようにのべている。ますますはっきりとあらわれていることを信じて疑わなかった。エの失敗にもかかわらず、イギリスにおいては、社会革命の兆候が、ィスト運動に失望したわけではなかった。ヨーロッパにおける革命一八四八年以後といえども、マルクスとエンゲルスは、チャーテ

るための地盤が存在するのである。そこでは、一方には工業プロ そうべからざる兆候があらわれている……。したがって、工業資 権から最後的に排除しつつあるこんにちでは、彼らと工業プロレ 世界商業恐慌、各人の生存をおびやかす直接的な物質的打撃にあ の政治的影響の敗北であり、それの決定的排除であった。だが、 去しうるための物質的手段、生産力が見いだされる。そして、もち うことが唯一の問題であるここイギリス、まさにこのイギリスに 本家かそれとも工業労働者か、そのどちらが将来支配するかとい タリアー レタリアー った。そして工業ブルジョアジーがいっさいの伝来の諸階級を政 イギリスの発展の強大な原動力は、大陸の政治的動揺ではなく、 「一八四八年四月十日のチャーティストの敗北は、もっぱら外国 トとのあいだに決定的な闘争が近づいていることのあら トが完全な社会革命を遂行し、 近代的形態における階級闘争が決定的な性格をおび ついには階級対立を除

> 紙にのせた論文のなかで、マルクスは、つぎのようにのべている。 格がよわめられず、そして決定的な闘争が無期限に延期されない ととは、全ヨーロッパのプロレタリア党の重大な関心事である。」 ことは、全ヨーロッパのプロレタリア党の重大な関心事である。」 ことは、全ヨーロッパのプロレタリア党の重大な関心事である。」 一八五三年に、一八四二年あるいは一八四八年にも増して深刻な でのような激化、さらにまた支配階級にたいする被抑圧階級の最 でのような激化、さらにまた支配階級にたいする被抑圧階級の最 でのような激化、さらにまた支配階級にたいする被抑圧階級の最 でのような激化、さらにまた支配階級にたいする被抑圧階級の最 でのような激化、さらにまた支配階級にたいするを抑圧階級の最 でのような発性のこのような発展、工業諸階級の利害対立の

であろう。」

であろう。」

な方策よりも、社会主義の精神がこもった成果となるでいるどんな方策よりも、社会主義の精神がこもった成果となるでいるどんな方策よりも、大陸で社会主義の名によって尊重されたかいとることは、大陸で社会主義の名によって普通選挙と質金労働者とがいるにすぎない。だから、イギリスで普通選挙

このときからであった。 以上引用したところによって、一八四八年以後のマルクスとエンリ、必ず闘いとられるということを主張している。ジュリアン・ハウ、必ず闘いとられるということを主張している。ジュリアン・ハク、必ず闘いとられるということを主張している。ジュリアン・ハルス、主としてエンゲルスが、チャーティスト運動の衰退を一面がルス、主としてエンゲルスが、チャーティスト運動の衰退を一面がルス、主としてエンゲルスが、チャーティスト運動の衰退を一面において評価したところによって、一八四八年以後のマルクスとエン

陰謀を暴露している。一八五三年、工業恐慌の兆候が濃厚となり、水らの民主主義」としてのチャーティストを階級闘争に駆りたてたいがの民主主義」としてのチャーティストを階級闘争に駆りたてたいがの民主主義」としてのチャーティストを階級闘争に駆りたてたいがの民主主義」としてのチャーティストにたいするはたらきが次第クスも一八五二年十一月二十五日号の「ニューヨーク・デイリー・クスも一八五二年十一月二十五日号の「ニューヨーク・デイリー・クスも一八五二年十一月二十五日号の「ニューヨーク・デイリー・クスも一八五二年十一月二十五日号の「ニューヨーク・デイリー・クスも一八五二年十一月二十五日号の「ニューヨーク・デイリー・クスも一八五二年十一月二十五日号の「ニューヨーク・デイリー・クスも一八五二年十一月二十五日号の「ニューヨーク・デイリー・クスも一八五二年十一月二十五日号の「ニューヨーク・デイリー・クスも一八五二年十一月二十五日号の「ニューヨーク・デイリー・クスも一八五二年十一月二十五日号の「ニューヨーク・デイリー・クスも一八五二年十一月二十五日号の「ニューヨーク・ディリー・クロートリン・ファイストである。

精力的な活動にたいし、マルクスもエンゲルスも絶大な賞賛をおく 来、大規模に復活するかにみえ、事実、アーネスト・ジョーンズの である。」とのべているように、 チャーティストが、(22) とのべているように、 チャーティストが、にひろがり、 そしてよう や く最後に職人たちにおり 層—機械工、 者運動のすべての段階では、ストライキは いつ も工場労働者の 上 っている。 ロレタリアート をとらえてきた点にある。 反対にこれまで の 労働 ではじまり、それから徐々に大ブリテンの大工業中心地 の 工 場 プ 働者の下層、 これと前後して労働者のストライキもはげしくなり、マル いまおこっているストライキの特徴は、それが不熟練〈非工場〉労 そしてよう やく最後に職人たちにおよんでいったの 紡績工等 移民の影響をいま直接うけている職人たち の あい だ -からはじまり、つづいて工場大衆の下層 一八四八年以 クスも、

を意図したのであったが、彼らが、一八五〇年代において実際に直を意図したのであったが、彼らが、一八五〇年代において実際に直め、無視することのできないものは、次第に全国的な組織にまで発生しようとしていた職業別労働組合の動向、そのなかでも圧倒的なほ、何事もなしえないという事実である。彼らはチャーティスト運展しようとしていた職業別労働組合の動向、そのなかでも圧倒的なほ、何事もなしえないという事実である。彼らはチャーティスト運動の革命的伝統を継承し、圧迫された不熟練の低賃金労働者によび助の革命的伝統を継承し、圧迫された不熟練の低賃金労働者によび助の革命的伝統を継承し、圧迫された不熟練の低賃金労働者によび助の革命的伝統を継承し、圧迫された不熟練の低賃金労働者によび助の革命的伝統を継承し、圧迫された不熟練の低賃金労働者によびがいることによって、急進的・社会主義的大衆政党を建設することが、マルクスとエンゲルスの指導と影響をうけつつ、チャーティスト運

面せざるをえなかったところの現実は、協同組合の急速な発展であり、労働組合主義者とブルジョア急進主義者の妥協であり、熟練労働り、労働組合主義者とブルジョア急進主義者の妥協であり、熟練労働は、この当時、まだ必ずしもこうしたイギリス資本主義の変貌を具体的に、たとえば、一八五二年の大争議以後、ニュー・モデル・ユニオンとしての合同機械工同盟が、労働界において獲得した圧倒的に優越した地位を認識するというように――把握することができなかったし、労働運動をたえず政治運動と結びつけ、革命の前提条件としか考えなかった彼らにとっては、労働組合主義を客観的に正しく関連動からの悲劇的な背離の第一歩が彼らとチャーティスト左翼との関係においてふみ出されるのである。

きなかったからであるといわれる。しかしながら、それはまた、マール市民的イデオロギーに対し、社会主義勢力を結集することがでいる感情的なもつれは、ひとつには、たとえばジュリアン・ハーニーが、マルクス主義よりも、大陸の社会主義、とくにルイ・ブランの思想に接近したこと、またアーネスト・ジョーンズの場合は、次第に思想を展開しはじめたブルジョア階級の選挙権拡張運動(一八六本年に第二次選挙法改正となって結実すべきもの)のブルジョア的との正規に接近したこと、またアーネスト・ジョーンズの場合は、次第に要力を増していった職業別全国的労働組合とこれと密接に結びついて運動を展開しはじめたブルジョア階級の選挙権拡張運動(一八六本年の方式)という。

「労働者階級の状態」で熱望した「チャーティストと社会主義者の合 はなかったであろうか。チャーティスト運動の末期は、エンゲルスが の両者の相互交替的な現象が有機的に把握されていなかったためで 義者のへゲモニーの掌握の過程にたいする分析が不充分であり、こ 従って労働運動における革命的チャーティストの後退と労働組合主 て、一八五〇年代におけるいわゆる労働組合主義=ニュー・モデル においてふれているが、ともすればその戦闘的性格だけが重視され ではないだろうか。労働組合の役割については、マルクスも「賃労働 つに至ったという事実を、正しく認識することができなかったから 坑労働者、機械工などの職業別組合が、チャーティスト運動とは逆 ユニオンの形成にともなう労働運動内部における勢力関係の変化、 と資本」において、またエンゲルスは「イギリス労働者階級の状態」 の職種にわたって、こうした熟練労働者の組合が牢固たる勢力をも に全国的に基礎をきずきつつあり、しかも五〇年代には非常に多く なわち一八四三年から四五年にかけて陶工、印刷工、ガラス工、 ティスト運動が全体としてその勢力を弱めつつあったその時期、す かも、チャーティスト運動と裏腹の関係において、つまり、チャー とをいうのだが き時期に ス労働運動党上からみるとき、チャーティストの衰退期ともいうべ ルクスとエンゲルスが、一八四五年頃から約十年間、まさにイギ や支持階層の点で方向転換・変質・変貌をとげつつあったこ といっても革命的でなかったというのではない、 -運動の革命的な側面だけをとくに評価し、あた イデ 炭

運動から遊離し、その衰退と崩壊を一層速めると同時に、全国的職 同」ではなくして、むしろその背離であり、チャーティストが労働 の結成の過程においてであった。 獲得した時期に相当した。労働運動における労働組合主義やブルジ 業別組合が、社会主義者にとって無視することのできない 勢力 を 際的なプロレタリアートの運動の再組織、第一インターナショナル ア急進主義の役割を、彼らが戦術的に正しく位置づけたのは、国

ズムからインターナショナリズムへのマルクス主義の発展の過程に 義からくるいくつかの基本的な矛盾を彼らがおかざるをえなかった 年代におけるチャーティスト運動の崩壊から、第一インターナショ ことを指摘した。われわれはこれを基礎にして、さらにチャーティ できた。そしてそのなかで、彼らをとり囲む時代の制約とその公式主 への思想的浸透などを中心にして考察するであろう。 スト左翼の思想とマルクス主義との理論的矛盾、労働組合運動とチ 教訓をあたえられるに至ったか、これらの点について、チャーティ ら、イギリス労働運動にかんする部分を、マルクス主義の定礎期とも いうべき一八四五年から五〇年代にかけて詳細にそして忠実に読ん ルまでのイギリスをふくむ国際的な労働運動から、いかに深甚な いて、これらの諸矛盾がどのように克服されてゆくか、一八五〇 われわれは以上において、マルクスとエンゲルスの著作のなかか ティストとの対立、ブルジョア・ラディカルとチャー ・ティスト

マルクス・エンゲルス選集(大月版)第二巻「共産主義者同

盟」四二七頁。エンゲルス 『共産主義者同盟の歴史』『ケルン 産党裁判の暴露』第三版(一八八五年)序文。

- の生涯の歴史―」第一巻二〇二頁以下にくわしい。 chte seines Lebens, 1933. 栗原佑訳「カール・マ この点については Franz Mehring; Karl Marx, Geschi-ルクスーそ
- (3) 拙稿「十九世紀後半におけるイギリス資本主義の変貌と労働 発生」(三田学会雑誌第五一巻第四号所収)。 組合運動の変転(その一)―労働組合運動における日和見主義の

(4) マルクス・エンゲルス選集第二巻、マルクス「保護貿易、

- 5 一八四七年十月九日号所載)。 由貿易 および 労働者階級についての演説」へノー マルクス・エンゲルス選集第六巻「議会政治と国家財政」四 ザン ・スター
- 四三頁、「ホイッグ内閣-十時間労働日の問題」
- 6 同上書四六頁。
- 7 同上書四七頁。
- 8 一頁。 同上書「イギリ スの十時間労働法案」(エンゲルス)六〇―
- 9 同上書六五—六六頁。
- 10 同上書「イギリスの選挙 グ党」九三頁。
- $\widehat{\mathfrak{i}}$ 選集第六巻一三三頁「新反対党創立のくわだて」。
- 12 13 John Saville; Ernest Jones, 同上書「労働者のストライキ -国民憲章」(マルクス)二三五頁。 Chartist, 1952, pp. 47-48

率 動 0) 分

勤労者家計の労働供給構造の解明

- 本稿の目的と問題の所在
- 有業率と労働供給価格分布の関係

有業率変動に関する観測事実

- 資料の性格と家計特性による層別化
- 測結果の概要(勤労者家計、成年人員三人世帯)
- (-)本稿の目的と問題の所在(#1)

過程にはじめて現れた現象であって、 層に対する労働市場の硬化(需要超過)という戦後日本経済の成長 **う二面的構造にその特徴を見出すことができる。前者は若年労働力** 中年女子就業者等に見られる低賃金労働者群の多数が存在するとい とくに 新規学卒者の著しい 求人難 という現象が 生起し始めたこと 最近におけるわが国雇用構造の変動は、一方において若年労働力 他方において依然として、中小企業被雇用者、日傭、臨時工、 これは云うまでもなく、

> 俟って出現したものである。かくして初任給は大幅に上昇し、また 中小企業とくにサービス業においてはこの年齢層に対する著しい求 齢層人口の相対的減少および進学率の増大という供給側の条件と相 規労働力への需要の集中とが、終戦時の出生率の低下によるこの年 度の経済成長に伴り労働需要の拡大と、終身雇用制度がもたらす新 人難が生じた。

傾向が見られてきたという現象である。 三はこれまでわが国特有の制度であった年功序列型賃金体系の崩壊 給上昇に伴う波及効果として賃金格差変動に与える影響であり、 がもたらす他の年齢層への労働需要の拡大効果であり、第二は初任 ことは十分予想される。その第一はこの年齢層に対する労働力不足 種々の面においてわが国就業構造の変動に将来著しい影響を与える すものとは云い難い。しかし、この新規学卒者に対する労働力不足 さてこれらの現象が直ちにわが国労働市場の全面的変化をもたら 初任給および若年層賃金率の上昇が今後も続くものとすれば、 上記三つの現象は何れもが 第

有業率変動の分析

三. 二八五